

大正六年一月一日發行

婦人と子ども

第十七卷  
第一號

フレールベル會

# 第十七卷第一號目次

現代文化と幼児教育の研究……………

幼稚園教育の積極性……………

幼稚園生活が幼児に與ふる弊害の一  
方面…………… 安井 哲

幼兒の衛生…………… 土川 五郎

會集の研究……………

遊戯と體操(リー)…………… 紹 介 子

七不思議…………… み な と

一、月…………… 記 者

色彩の心理…………… 菅原 教造

## 本誌定價

一冊 郵税共金拾參錢 六冊前金郵税共七拾貳錢  
拾二冊同金壹圓四拾四錢 郵券代用 一割増

## 購讀申込

本誌購讀御希望の方は右定價表により振替貯金にて御拂ひ  
込下さい。直に送本致します。(振替口座東京一七二六六  
番)

## 本會宛御用務

本會宛諸般の御用務は左の如く願ひます  
庶務及會計に關する御用務は東京女子高等師範學  
校附屬幼稚園内フレーベル會事務所宛  
本誌編輯の御用務(寄稿、廣告等)は東京府下代々  
木山谷一二四倉橋惣三宛

大正五年十二月二十八日印刷納本  
大正六年一月一日發行

編輯兼發行者 倉 橋 惣 三  
東京府豊多摩郡代々幡村大字代々木山谷一二四  
印刷者 東京市本所區番場町四番地 功  
印刷所 東京市本所區番場町四番地  
東京女子高等師範學校附屬幼稚園内  
發行所 フレーベル會

羽仁もと子と主幹

# 子供之友

□ 初日の出(うつくしいひらき繪 伊勢神宮と二見が浦)……………北澤 樂天

□ 楽しい元日(太郎さんの一日)……………佐々木 林風

□ ワシントン 一代記子供のときのワシントン。青年のときのワシントン。軍人及び大統領としてのワシントン。

□ かるた會(誰れが一番上手でせう)……………栗原 玉葉

□ 天の上にもお正月(地上のお正月 天上のお正月)北澤 樂天

新年附録 桃太郎すゝろく

□ 得手八人力(新撰いろはかるた)……………羽仁もと子

□ ドウブツ郵便局(新しいお伽噺)……………河井 醉茗

□ さばきの鐘(動物愛護の物語)……………松岡 八郎

□ 私が飛行機に乗れたら(無邪気な子供のついで方)

□ 歴史上十五題(本誌獨特裏表紙の趣向)

定價 一冊 拾貳錢 半税 七錢 二 婦人之友社 東京 振替 東京 一六一〇〇 谷

顧問 高島平三郎先生

# モドコ

子供繪雑誌は玩具であると同時に教科書であります。お子様方がコドモを御覧になつてゐる間に物事を覚えお行儀かよくなること不思議な位です。

新年  
附録  
**日本一雙六**

本の特色  
まじめで教育的なこと  
繪が叮嚀で美麗なこと  
お話が易しく面白いこと  
片假名のみで讀易いこと

□ 定價 一冊十二錢  
□ 郵 税 五 厘  
□ 六冊郵税共六十九錢  
□ 十二冊 一圓三十一錢  
□ 郵税共一圓三十一錢  
□ 總て前金の事  
合本定價  
各集郵税共五十錢

東京市小石川區  
林町五十七  
**コドモ社**  
電話番町六一八  
振替東京二七九六三

合本出來  
大正三年七月號より  
同 大正四年三月號まで  
同 大正四年六月號より  
同 大正四年七月號まで  
同 大正五年五月號より  
同 大正五年六月號まで

## 婦人と子ども

大正六年一月一日  
第十七卷第一號

### 現代文化と幼児教育の研究

現代ほど、文化の諸方面から、幼児教育の研究に有益にして適切なる貢獻をして呉れる時代はあ  
るまい。否、將來に於ては、此の幸福は益々増し  
加へられるに相違ないが、從來の、諸文化が幼児  
教育に殆んど何等有用な關係を有して居なかつた  
時代に比すれば、實に天地霄壤の差があるといつ  
てもよい。昔日、幼児教育の研究者は、據つて以  
て知識的基礎とし、科學的參照とすべき、何等の  
學問をも與へられなかつた。故に、彼等は、一つに  
老人達の經驗と自分等の常識とに訴へる以上に、  
其の研究を深くすることも確かにすることも出來  
なかつた。その結果は、幼児教育の研究を、何の  
精緻も、深味もない、粗大にして淺薄なるもの  
にして仕舞つた。昔の幼児教育研究者が、充分に深  
い興味を其の研究に有し得なかつたのも、無理か

らぬことであつたのである。之れに反して、今日  
は實に、多くの學問と知識とが吾々の研究に參加  
し、手傳つて呉れる。而して、其の興味を、い  
くだけでも深く與入りさせて呉れる。幸福なるは現代  
の幼児教育研究者である。

幼児教育の研究に最も密接した適切な關係をも  
つて吾々を補助して呉れる學問の第一は、輒近に  
於ける諸教育學說である。一般教育學の知識が幼  
兒教育の研究に大切なる關係を有すべきことは、  
昔から言はれて居た。しかし、事實上、從來の教  
育學、殊にヘルバルト或は其の餘流を主調とする  
觀念主義教育說は、幼児教育のために、特に大し  
た密切な接觸を有するものではなかつた。故に、  
幼児教育研究者は、形式上の準備として、一應之  
等の教育學を通過して置けばそれで足りた。それ

だけに何の貢獻せらるゝ處も多くなかつた。然るに、晩近の諸教育説に至つては、その作業主義説にせよ、生活中心主義説にせよ、美的教育説にせよ、殊に所謂人格主義教育説の如き、いづれも、極めて密なる接觸を以て、幼児教育の研究に相獨れて來る。若し、幼児教育の研究といふことを先きにして之れ等の晩近教育説に對すれば、殆んど、下世話に所謂詭へ向きに過ぎたるの觀ある位である。

次に、近世の發生的心理研究の進歩も、幼児教育者にとつて、最も好都合なるものゝ一つである。其中、兒童研究に就ては言はずもがな。殊に民族心理學の研究は、實に豊富なる好參考資料を、幼児教育の研究に提供して呉れる。曰く道德の起原其の發達、曰く藝術の起原其の發達、其他、民族心理學の取扱ふ總ての問題が、一つとして幼児教育の研究に、必須の知識たらざるものはない。

第三に、近世美學の諸研究も、幼児教育研究者にとつて、非常に大切な善知識となるものである。吾人は、普通心理學、殊に純理論的な、就中彼の

構成主義心理學などよりも、美學によつて、幼児教育の研究を助けられることが却つて多い。美學といへば、最近の繪畫藝術の大きな傾向、假令は彼の印象派や後期印象派の作品、殊に其の畫論の如き、幼児教育の研究者に、どの位大切な知識と訓練を與へるものであるか分らない。

以上は、たゞ主なるものを一例として擧げたに過ぎない。しかし、之れだけを見ても、現今の幼児教育研究者が、如何に、よき時代に際會して居るかは、感謝するに餘りあるのみならず、幼児教育の研究が、之等の諸學問の方へも少からぬ貢獻を與へ得る。斯くて、現代の幼児教育研究は、幼児教育研究といふ、狭い特別の世界に、規模の小さい、底の淺い、生氣のないことをして居るものではなくなつた。穿てば何處迄も穿てる。掘れば何處迄も掘れる。擴げれば、何處迄でも擴げられる。そこに總ての學問的研究が有する、鈍ることのない無際限の興味と熱心とが湧き上るのである。

愉快なるは幼児教育の研究である。而して、幸福なるは現代の幼児教育研究者である。

## 幼稚園教育の積極性

消極的教育といふ語がある。自然派の教育論者によつて屢々用ゐられる。其の意味は、兒童は自

己の自然の發達性を有する。教育はその天賦の發達を存分に發輝させるのが第一の任務である。故に教育は兒童の自然の發達性を尊重して、敢て之れを妨げ、冒すことなき様、慎重なる態度を執らなければならぬ。徒に與へんとし、濫に教へんとするは、此の意義に逆らふものである。極言すれば、自然に對する冒瀆である。少くも餘計のことである。といふのである。尤も、教育一般に亘つて之れ程あからさまに此の考へを述べるものは多くはない。先づルソー位のものであらう。しかし、幼兒教育に就ては、此の考へ方が可なり行き亘つて考へられて居る。讀み方によつてはフレイベルの言葉の中に既に此の意味がある。ルソーの影響を強く受けて居る、近世の自由遊戯主義保育

論などの中には、一層此の考へが多くあらはれて居る。

吾人は、此の種の考へ、即ち、教育の消極的態度の中に、ある大きな真理の一面が含まれて居ることを見る。殊に教育の實際上此の反對の弊害に對する反動的氣分、乃至或る警戒的意味に於て、大に此の種の考へ方に尊重の意を感ずる。かくて、吾人は、今も、否、何時迄も、深き尊敬と沈潜の心を以てルソーを讀む。しかし、消極的教育はそれだけで教育の完き姿ではない。

幼稚園と子供の自由な遊び場、幼稚園教育者と心なき子守達。之等の對立の間には、實に深い差別があり、相違がある。それは、幼稚園は、たゞ子供を遊ばせる處でなくして、教育をする處である。幼稚園教育者は、たゞ子供の無害な相手たるに止まらずして、教育をする者である。すなはち、

それが教育であり、教育者である限り、いふまでもなく其の目的に積極性を有するものである。其の効果を積極的効果を期するものである。幼稚園は假令方法に於て或る消極的態度をとるの要ありとするも、教育であること夫れ自身が、積極的なものである。

我國の幼稚園の歴史は、初めに、教へ過ぎる幼稚園があつた。その弊に對して、次に極端な消極的幼稚園が續いた。その中には、無能も混じた。怠惰も混じた。而して、終には、幼稚園教育者自ら自分のして居ることに、何の積極的信念も、意氣も、徹底も有しない様にさへなることもあつた。或るものは言ふ。間違ひのない様に、あたらずさはらず打ち捨て、おきます。或るものは言ふ。計畫なんぞ立てません。或るものは言ふ。幼稚園は子供に別段何にもする處じやありません。斯くて、意味の深い、實に深いルソーやフレーベルの考へが、淺薄な無思慮な、更に時には無責任な放任と混同される。而して、幼稚園教育の存在の意義が、他から疑はれ又自分にさへも疑はれる。

吾人は、兒童の天賦の自然の發達性を信ずる。之れを尊重し、又之れに信頼する。しかし、同時に、我が教育を信じなければならぬ。之れを尊重し、之れに信頼しなければならぬ。そこに、吾人の幼稚園が、存在の意義と職能とを有つ。

幼稚園は、それが幼兒に與へ得べき教育の一歩を行ふものでなければならぬ。幼兒の爲に必要にして可能なる計畫の一つをだも怠つてはならない。その教育は、どこ迄も幼兒の爲に積極性を有するものでなければならぬ。此の責任と自信とを缺いで、吾人の幼稚園に何の努力があらう。何の工夫があらう。何の失敗と歡喜とがあらう。何の生命があらう。

但し、幼稚園の積極性が、其の内容と程度とに於て、幼兒教育としての正當なる限度をもつことはいふまでもない。併し、吾人は、此の限度を守ることと幼稚園教育の積極性を失することとを混同してはならない。寧ろ幼稚園の積極性に對する強き信念があつて、而して後、此の限度の顧慮と研究とが起るのである。



# 幼稚園生活が幼兒に與ふる弊害の一方面

東京女子高等師範學校  
附屬幼稚園主事

安井哲

家庭に於ける幼兒の自發的生活に特別の設備と計畫とを與へようと企てたものが、一口に云へば幼稚園となつたのであります。そこで、この計畫があまり成人の見地からのみ爲される時には、幼兒の生活には、反つて不適當となることがありますので、吾々幼稚園教育に關係するものは深く注意せねばならぬと思ひます。或種の幼稚園はこの點に於て、幼兒の生活を反つて非活動的に導きはせぬかといふ懸念を懷かせないでもありません。

幼兒は自發的活動の最も盛なるものであることは、少しく幼兒に接したものは皆經驗的に之を知つて居ります、従つて幼稚園の教育に於て、この自發性を最も尊重せねばならぬといふことは一般に認められて居るのであります。併し如何にせば

徹底的にこの性を發揮せしめ得るであらうかといふことは、充分の考慮を要することであらうと考へます。

假りに幼兒の幼稚園生活の一日を想像して見ますに、唱歌を習ひ、「鳩ぼつぽ」や「蝶々」の遊戯をする、或は豆細工や粘土細工や畫き方をします。是等は皆幼兒の好むものには違ひありませんが、併し若し十分乃至三十分の間、自分の知らぬ唱歌を教へて頂いたり、友達と一緒に先生の指導の下に「蝶々」や「鳩ぼつぽ」をして遊んだり、又は先生と一緒に一定の場所で、粘土を材料にして、船や茶碗を拵へたとて、この間に自分の精神や身體を最も自由に活動させた範圍はどれほどでありますや、勿論この時間外に戸外で自由に活動

することはありませうが。

何等特別の設備も計畫もない家庭では、幼児は手あたり次第にその身邊の器物をもてあそんで所謂いたづらをやります。机の上にある鉛筆で書物に濫塗をやつて、父親を困らせたり、針箱から母の缺を持ち出して大事な布片を切つて母親を泣かせることもありませう。その外手あたり次第に目に觸れるものを持つて來ては「これは何」「これは何にするの」と疑問の連發も致しませう。そこで母親がその全力を幼児に注ぎ得ぬために、書物の代りに畫用紙を準備して置きなかつたり、布片の代りに紙を備へて置きぬといふ手ぬかりがあつても、或は又忙しい母親から一々の質問に對して解答を與へられないといふ不満があつても幼児自身から云ふならば、何の拘束もなく、自分の思ふままに鉛筆や缺の使用を試み、新奇なものに自由に觸れ得るので、これが爲めに父母より叱られることさへなければ、彼等自身は大なる満足を味ひ得

るのでありませう。

幼稚園及び家庭に於ける幼児の生活を比較して見ますと、私は何うしても、茲に一種の感じを起さざるを得ぬのであります。幼稚園は家庭に於ける母の不準備に對して、充分なる計畫を爲さんと企てるのでありますが、例へば缺を與ふる場合や鉛筆を與ふる場合には、常に一定の品を與へます、粘土を與ふる場合にも、常に一定の分量を與へます。即ち主として成人の見地から考慮されたもののみを與へるのであります。斯くて幼児はその活動を、與られた範圍外に及ぼすといふことが出来なくなりませう。故にその保母の考案の範圍が狭ければ狭いほど、幼児の經驗は狭くなつて、幼児は常に出來合の材料を貰ふに止まるのであります。

實驗に依りますと、粘土細工を保育室内でさせる場合と庭園でさせる場合とは、假令どちらも自由に製作せしめるとしても、その成績に非常な違があることを發見します。即ち室内では幼児

の精神を刺戟する材料に限りがあり、且又教師が選擇して與ふる物にも限りがありますが、戸外に於ては、草でも木の實でも小石でも枯枝でも、その目に觸れるものは悉く幼児の注意を惹きますので、幼児はその興味に従つて、製作せんとするものを自由に選擇するのみならず、その製作物中に、種々の材料を採用するのであります。例へば自分の好きな草花が其處に咲いて居るために、粘土で花瓶を造らんと考へ、これにその花を摘んで、實際に挿入したり。或は虎や獅子を造つて、小石を眼に用ゐたりするやうに、幼児は自身で保母が想像する以外に多くの應用を見出すのであります。これを僅に一枚か二枚の草や木の葉を摘み來つて粘土に型を押させるのに比して、その選擇範圍の擴大に非常な違ひがあるのであります。加之、この場合に於ては有目的の作業をなす機會が自然多くなるのであります。

それから又成人本位に計畫された指導のみを受

くる幼児は時とすると受動的の心狀を保持するやうになつて、その周圍の事物に疑問を懷くといふ所謂學習的若しくは研究的の態度（幼兒には不適當な言葉ではありませんが）を失ふやうになります。即ち保母は常に自ら考へた話を聞かせ、自ら工夫した手工を授け、又幼兒の目撃するものに對して自分の知つて居る智識を授けるといふ風では、幼兒は常に受動的に保母の話すことを聞き、教ふる所を習ふといふ状態にのみ居るのであります。この状態が三年間も幼稚園に於て繼續されれば、小學校に行くやうになつても、或は自分の頭を活かして學習するといふ習慣がなくなつて、教師が授けねば常に非活動的精神状態を保持するといふやうになる憂ひがなくはあるまいかと思はれます。以上は幼稚園が、家庭の不準備と無計畫なる點を補はんとして、あまり成人の見地のみより考案し過ぎたる結果を想像したのであります。そこで幼稚園の仕事は幼兒の實際生活を能く觀察して、

なるべくそれを豊富にせんが爲めに、幼兒自身をして種々なる經驗をなさしむるやうに努むることであると思ひます。即ち幼兒の生活をして充實せしむるには如何なる材料を供給すべきかを工夫するのが保姆の最大切な仕事であつて、その材料の使用は主として幼兒自身が試みねばならぬのであります、一例を擧げて之を説明しますれば、幼兒は動物を愛するものであるから、動物園參觀の便のある場所ではこれを見物させます、又種々の動物の玩具を興へるといふ時には、幼兒は積み方や粘土細工や又は豆細工等をする場合に於ても、その動物の玩具を材料として、動物園の實驗を發表するのであります、即ち積木や豆細工で動物園の建物を造り、その中に玩具の動物や粘土で作つた動物を入れ、遂には紙片を切つて切符を作り、保姆や友達を招いて動物園の見物をさせるのであります。

以上のやうな幾何かの玩具が幼兒の精神を刺戟して、これが曾て經驗した動物園を造ることゝなり、動物園が出来たので、それを參觀するといふ遊

戯に進んで来たといふことは實に面白いことではありませんか。茲に幼兒の生活は實に充實した自發的な、満足なものとなるのであります。これを保姆が斷片的に粘土細工の時間に象を作らせたり、豆細工の時間に飛行機を作らせたり、或ひは積方で字を作つて、それ限りであると云ふのに比べれば非常に有意義なるものであると思ふのであります。

以上申しただけでは、充分に私の申さんとする意味を明かにすることが出来なかつたかも知れませんが、要するに幼稚園が成人の立場からのみ考案した出来合の智識を幼兒に與へ、幼兒をして常に受動的の生活にのみ馴れしめて、不知不識自發性を損害するやうなことの無いやうに注意したいと云ふことゝ、もう一つ、自發的の生活を尊重すると云ふことは決して何等活動の刺戟のない場所に放任して置くといふのではなく、如何なるものが幼兒に對して最價値あり、興味ある刺戟材料であるかと云ふことを幼兒の實際生活の觀察より推して、充分に研究せねばならぬといふのであります。

# 幼児の衛生

麴町小學校長 土川五郎

晩近學校衛生が、進歩、否寧ろ一變して、在來のものとは、全く其立脚地を更へたのは、教育者の最も注目すべき一事であると思ふ。

従來は學校衛生なるものは、國民の體力増進、即保健といふ輪廓の一隅に、小さき部分を占めて居て、教育者と校醫とで、通氣、通風、採光とか、身體検査とか、例に依て、例の如く、平々凡々であつた。併し國民の保健といふ側が、科學の進むにつれて進歩し、學校衛生も亦現在の如き有様では、勞多くして益なきを悟つて來た結果は之を根底から覆して、

幼児時代(幼稚園時代)小學兒童の健康を増進せしむることが、國民保健の最良策であつて、之を中心として、輪廓を描く可きであると云ふ事にな

つて來た。即ち今迄一隅に置かれたるものが、中心と變じたのである。即ち學校衛生の主義が、變つて來たと云つてもよいのである。翻て在來の身體検査を考へて見ると、身長、體重、胸圍を計り、眼疾、耳疾、喉頭其他に於ける異狀を診査し、體格の強中弱を定めたが其影響をどれだけ學校や幼稚園が受けて、兒童幼兒をどれほど益したか、家庭の反省を如何程迄促し得たか、幼稚園によつては、毎月検査して、統計を作り、家庭に通知して居る所もある。其骨折りは實に大であるが、其效果は割合に尠いではなからうか。

學校衛生が國民保健の中心となり國民が身體を發達せしむるに、必ず此關門を通る。國民保健の鍵は、學校衛生が握ると云ふ重大なる意味が含ま

れるとすれば、從來の身體検査や、消極的衛生の設備と作業では、満足が出来ないのである。殊に幼稚園は、最も發育に留意せねばならぬとすれば、層一層の改善を要する。聞く所によれば、文部省が學校衛生を改良する目的で、委員を擧げて、着着歩を進めらるゝといふ事である。吾人は其改善せられたる新規則の頒布に先きんじて研究し、幼兒の爲めに良いと信じた點は、片端しから實行することは、幼兒の爲めに、幸福であらうと思ふ。

一體質。重に内臓の疾患、即ち肺、心臟、消化器等の健、不健を診査して、其傳染性のもものは、在園せしむることの出来ないのは勿論であるが、健全なるものと、疾患に捕はれ易き素質あるものとを區分して、平素に於て適當なる措置を取らねば、將來取り返しのつかぬ事が出来るし、又相當の運動と遊戯とに依るも、益健全に育てることは出来ないと思ふ。

二精神的變質。言語の障害や、頭部半側の頭痛

等の身體的變質は別として、精神の變質は實に看過すべからざるものである、虚言を吐く、人前を飾る、虚榮心に富むといふ如き。ふさぎ勝ちのもの、怒り易いもの、啼泣し易きもの、此等は吾人が一の性癖とし、氣質の上より起れる一の現象として、取扱つて居た。しかし此等のもの、内には、近頃の進歩したる精神分折學(醫學上の)より見て、一のヒステリー症と決せらるゝものが意外に多く、尙神經衰弱症、憂鬱症の如き(睡眠時間の不足、營養不良より起る)傳染病後に起る心身過勞より生ずる症狀の如き、幼兒に比較的多きを占むといふことは國家の爲め、憂慮すべきものである。此等の幼兒に對しては適當なる指導をして、尙功果の出でない場合には、須く醫師と協力して、精神狀態の検査、教育的治療及び醫學的療法をとらねばならぬ、即精神的性格の異常(精神の低格)、知識の異常(精神薄弱)の那邊にあるやを調査し、適當の處置を取らねばならぬ。斯くして幼兒の身

體を決定し、健康兒に對しては、積極的體育の法を遊びの間に配劑し、疾患を受け易き素質あるものは、又其缺陷を補ふことに努め、幼兒全體としては永く耐へしむべき運動をなさしむるものと僅に其一部をなさしむるものと其體質によりて、加減することが極めて必要と思ふ。

又幼兒の喜んで爲す遊戯につきても、身體の各部に涉りて均等に運動せしめねばならぬ。時に體の上部のみに偏し、或は脚部のみに傾く弊があることに留意せねばならぬ。

消極的衛生も亦看過す可らざるものがある。清潔を保ち、傳染を防ぎ、空氣の流通、採光、溫度等も又必要であるが、幼兒を神經過敏にし、恐怖せしむることは、最も慎むべきことで、幼兒はどこ迄も無邪氣に嬉けて、両親と保姆とが細心の注意を拂ふべきである、先づ今回はこれで擱筆するが、終りに此稿を起すに當り、石原醫學士の講演を参照したることを附記して、同氏に謝意を表して置く。

### ○本誌發行日の變更

本誌はこれまで毎月五日に發行して來ましたが都合により本號及び本號以下の本誌は毎月一日に發行することに改定いたしました。

#### ○南の窓より

俺はこの頃興味といふやうな安っぽい言葉で現される貧弱な悦びを慢性自己欺瞞に過ぎないと思ふまでにつきつめた心持になつて居る。俺は多くの興味が、對象として無價値に等しい場合が多いにも拘らず、興味を味ふべく準備された心の型に逸早く適應して行くために、實價以上に買被られて平氣な顔をして居る狡猾さを發見した。

卑い興味をついくり合せて、生活の空隙を填充しやうとする精神的浮浪人の努力の果敢なさよ。

マントルピースの上に置かれた福壽草の不調和を嘲罵して、小さな痛快を味ふのは、神經過敏な低級興味追求者の事である。俺は直ちに福壽草の呼吸を感じる。淺みどりの葉と黄の花びらに俺の魂の緊張が適度に弛められることを感ずる。俺は小さい一個の生命と向ひ合つて居ることを感ずる。

自然に歸れ！ 而して汝自身に歸れ！ (孝一耶)

# 會集の研究

貴園にては日々の會集を如何なる風にしておいでますか。  
又會集をなさる御趣旨は何でありますか。

幼稚園に於ける會集は、たゞ因襲的に、習慣的にして居れば兎に角、少しでも其の意義を考へ効果を考へて來ると、可なり多くの色々の問題を惹き起します。そこで先づ、現在諸幼稚園で、どんな風に此の會集をして居られるかをお尋ねして、お互の研究の資料にしたいと思ひました。すなはち、茲に掲載しましたのは前記の問ひに對して、お送り下さつた報告であります。編輯縮切りの切迫上、極く少數の幼稚園にお尋ねした丈であり、又期日のない爲お答を頂けなかつた處やありましたが、之れだけを拜見しても、私共にいる／＼のことを考へさせます。御報告下さつた各園に厚く御禮申上ます。尙此の問題に關して、御報告なり御意見なりを續々お送り下さるならば、如何に研究上幸福かと思ひます。

○

東京 芝麻布 共立幼稚園

## △趣旨

會集は其日の始業にて、終日の保育上に最も關係連續せるものなれば、及ぶ限り注意をばらひ、圓熟なる保育を徹底せしむる組織的要素を與ふるにあり。

## △方法

會集室は殊に裝飾其他總てを整頓し、周圍の影響より來る感化に最も注意す。

- (1) 始業の合圖と等しく靜肅なる樂器を奏し、朝來活躍せる兒童の精神を沈着せしめつゝ、全園兒を室に集め、互に麗はしく朝禮の唱歌をなし、次で幼稚園修身歌(國家尊長に對する)を歌はしむ。
- (2) 保育上殊に注意すべき事項、時に當りての出來事は靜止のまゝ園長訓話をなす。
- (3) 季節自然物に對し、世の中の一般を具體的



に知らしめ、談話、圖書、唱歌などにより、其趣味感想を喚起し、相互に美しき共同生活を樂ましむ。場合により簡單なる動作をなし興味を附する事あり。

右凡二十分間にて活氣ある行進曲にて各組自由遊戯に移る。

總て自然本位なれば、一定の方法をとる事不能なれども、許されたる自由の範圍にて、規律秩序を自覺せしめ、融和快樂の裡に、意志の鍛練をなし、諸般の興味を内に完熟せしむる様注意す。

東京 頌 榮 幼稚園

#### △趣旨

一、各兒に無限なる喜び即ち満足の念を興ふるにあり。

一、當日の保育事項に連絡を取る爲めに、其の

#### △方法

一、當園會集は毎朝一度必ず幼兒を遊戯室に集め保母と幼時とが始業の挨拶即ち禮を致します。其合圖は風琴の音色を以て致します。  
一、禮がすみますと、概して朝の歌、幼稚園修身歌を歌ひ、其他二三種の唱歌を歌ひます。

又實物もしくは標本を示して話す事もありません。

一、在園時間中は泣かずに元氣よく満足して遊ぶ事を獎勵致します。  
一、時によりて日々の出來事に依り、或は直接間接に聞き得らるゝに依り、其の可否につきて話します。

一、新入園児ある際には、其幼児に對する友愛情につきても此の際に知らしめます。  
一、幼児中缺席、幼児の安否等も此時に問ひます。

一、又時としては、最後の時間に於て再び幼児を會集して、談話會、音樂會、等を開きます。  
大略各の様に致して居ります。

#### △方法

私の園は淺草本願寺の一部の家屋を使用して居ります爲めに、宗教の儀式は用ゐませんのですが、家の中に大きな佛壇があります。さうして全體に疊を敷てありますから、其佛壇の前に一同を座らせ宣誓を致します。是を朝の御挨拶又は朝のお勤めと申します。其仕方は、毎朝一番お行儀の良い子供を保母が一名呼び出しますと、其子供は一同の前に出て座り、佛様に向てお辭儀を致しまして、左の言葉を述べるのであります。

東京 徳 風 幼 稚 園

先生や、お父さまや、お母さまの、言ふ事を能く聞いて、偉い人に爲ります。

先生お早う御座います。皆さんお早う御座います。

是は保母に選ばれた子供が指導者と爲りて、大きな聲で『先生や』と申すと、一同は其指導者のいふ通り『先生や』と合唱するのであります。其如く交代に合唱して、朝のお勤めを終るので御座います。續いて我が子良かれの唱歌又は其他の唱歌を續けるか、或は談話を爲すか、幼兒の其時の様子に依りて致しますから一定して

は居りません。

### △趣旨

會集を爲す趣旨をお尋ねであります、要するに子供の心を落付けるといふ事、僅かな時間でも子供ながら眞面目にゐる事、改まる事、こういふ時に申す事は能く了解の出来るものであります。

す。即ち泣く子は偉くなれぬ、弱い者をいぢめる子供は偉くなれぬ、偉くなる子供は弱い子供を助ける、さびしがる子と遊んであげる等、朝のお勤めの時に合唱する『偉い人に爲ります』が萬事に付けて子供各自の心にしみ込んで居るやうに思はれるのであります。



### △趣旨

全園児の統一と親睦を計る事を主として居ります。

東京 女子大學校附屬豊明幼稚園  
供に撰擇させて、左の中二、三をいたして居ります。

### △方法

會集は全園児共に毎朝大凡三十分位いたし、朝の挨拶、名簿調べ、時には訓示や自然現象、社會の出來事などに付きて、子供の注意を呼び起すやうなこともいたします。其他はなるべく子

- 一、唱歌、談話、の練習
- 一、行進
- 一、遊戯（高飛び、幅とび、猫とねずみ、たき鬼、スキップ、人捕り、子とろふ、椅子取り、汽車遊、探しもの、綱引、バスケットボール等）
- 一、動作遊戯（花咲爺など）



### △趣意

會集を致します趣意は、普通活潑なる幼児は一年中殆んど靜肅に致して居るといふことはありません。まして私どもの幼稚園のあります日本橋區などでは、家庭の情況につれ尙更のこと、考へます。それで少しでも心を落ちつけるといふ習慣を幼児時代より附けて置きましたなら、幾分か感化を與へることが出来ませうかと考へまして、試みて居る次第で御座います。

今日までの経験によりますと會集の時に滿場靜肅にして水を打ちたるやうになり、靜かに訓話を聞いて居りました時には、其日必其訓話を守つた成績を見ることが出来ます。

私の幼稚園は只今は小學校内に假りすまひを致して居るのでありますから、遊戯室は狭く、設備も整つて居りませんから、思ふやうに致しま

### 東京 日本橋區第一幼稚園

すことも出来ませんが、出来ますることならば廣い室で周圍に腰掛を置き、幼児に腰をかけるさせて靜肅沈黙を守らせて見たいと思つて居ります。

直立不動の姿勢で沈黙を守らせるといふことは、幼児には随分むづかしいことだと存じますが、なれますと決して難いことではありません。又その爲めに幼児の快活なる特性を傷けるといふことも決してありませんこと、存じて居ります。

歸宅の際にも一同を一室に集めて、其日の出來事につき訓話を致しましてから歸らせて見たいと考へて居りますが、其方法は只今研究中で御座います。

### △方法

私の幼稚園では毎朝九時半に合圖の鐘が鳴りま

すと、幼児は皆運動場の一定の場所に整列致します。各受持の保母に引率されて遊戯室に集まり、各組一定の場所に整列致します。當番保母は正面に立ち静肅になるのを待つて樂器の合圖で一同禮をなし、朝の挨拶の唱歌が濟みますと、保母が「サーお静かに」との合圖で幼児は

皆手先を組んで前方に垂れ、姿勢を正しくし口を閉ぢて、三十秒乃至二分間位の沈黙を守ります。其間に於て保母は訓話を致します。訓話が終りますと、幼児は兩手を兩側に垂れ、普通の姿勢になります。唱歌又は遊戯を二つ三つ致します。これで朝の會集が終るのであります。

大阪府女子師範學校附屬幼稚園

△方法

當園では一日に二回の會集(朝會、終會)を致して居ります。

朝會では、定め時刻に全幼兒(三組九十名)を會集場に集めまして、先づ朝の挨拶を致させました後、君が代合唱、主事(保母)訓話、二分間運動、行進と云ふ順序に行つて居りますが時間は十分乃至十五分間であります。

終會は一日の終りに朝會と同じく全幼兒を集め

まして、凡そ三十分間唱歌、並に諸種の遊戯を致させて居ります。

△趣旨

當園で會集を致します趣旨は全般につき申上ますと、園内全幼兒の共同訓練を其主なる目的と致して居るのであります。従て其行事も他の一般の保育の場合とは聊か其趣を異にする點がありまして、前に擧げました諸種の行事に於きましても、幼兒の自發的、相互的作用に因ると

申すよりも、寧ろ一種の團體の力で共同と云ふことの氣分を幼兒相應に味はせたいと云ふ様な考で致して居るのであります。

朝皆が出揃ひました時に、保姆始め全幼兒が一室に會しまして、互に朝の挨拶を致し、又歸る時にも同じく全幼兒が集まりましたして、別れの挨拶を致しますことは甚だ必要な態と存じますので、當園では朝會と終會と二回の會集を致すこととして居ります。

君が代の合唱は毎朝致して居りますが、之は合唱の間に君を敬ひ國を愛する心情の基礎を陶冶したいといふ考であります、之が爲めには勿論

第一に先づ保姆が其心情を持つと云ふことが根本でありますから、保姆自身毎朝其心情を持ち得る様、内に此根本に培ふことに努力し合つて居るのであります。保姆の心情の自然發露が幼兒に共鳴しまして、不知不識の間に幼兒が其氣分を味ひ得る様にありたいと念じて居るのであります。

二分間運動、行進、唱歌、遊戯、等は一面には全身運動によつて身體の發達を圖りますと同時に、一面には全幼兒が共同的に楽しく歌ひ愉快に遊ぶ間に共同的の麗しき心情を養ひ立てたいと希望して居るのであります。

大 坂 中 大 江 幼 稚 園

△趣旨

せめて一日に一回は成るべく園兒を一堂に集めて顔合せをさせ、保姆も皆打揃ひて此多くのも

のが同じ一つの幼稚園の子供と先生で又お互の友達であるとの心持を新にさせ、同時に多くの集りには、互に辛抱しあつて、猥に自我を發揮

せず、靜に眞面目にお話を聞くとか、一緒に歌をうたふとかして、楽しく陽氣に、然もそれは緊張的の態度でなく唯何となう落付きたる氣分の中に在しめたい。斯くて此機を利用して園としての一般的訓練を施し、各受持保母も此心を心として其日の保育にあたると云ふやうに。

#### △方法

けれども何分幼兒數が非常に多く、便宜上全體の會集を大略年長の組と年少の組に二分して隔日に行ひ、中一回は必ず全兒を集めて、保母が毎週順番に指揮者の地位にたちて、偶發事項とか、訓話とか、お伽噺などを試みる、而して二分せし方も其受持保母が順番に指揮者となつて話をするとか、時には或一組を出して、遊戯をなさしむるか、其他の事をするか、それは指揮者の任意として、之に伴ふ樂器も指揮者の命のまゝに、他の保母が順番に奏するか、又は指揮者が自ら樂器に向ふこともあつて一定せず。時間は長く

とも三四十分を超えず。但幼兒を會集室に入るには、洋琴の音を始めは強く、次第に弱くして步調を之に伴はしむ。幼兒が落付きたるとき、主任が前面に立ちて、お立ちなさいと低唱すれば、幼兒一同正しく靜かに起立同時に各保母も成るべく其受持兒の前面と思はるゝ處に進みて幼兒と互に注目す、此時主任が御挨拶をと唱ふれば、幼兒は先生お早う御座いますと至極叮嚀に敬禮す。保母も之に應じてお早う御座いますと至極叮嚀に答禮す。(本園にては特に保母が答禮して前屈低首の場合、幼兒は既に直立の姿勢にかへり居るなり。之れ叮嚀なる保母の答禮振を幼兒が目にして非常に満足するを以てなり。)次に主任が再びする合圖にて。幼兒互に注目皆さんお早う御座いますと叮嚀に敬禮す。(之れも緊張的ならず唯靜に眞面目に落付きたる氣分にて行はしむ)會集終れば、樂器の合圖にて一同起立敬禮、其儘出る方向に樂音にて室外に引率、

雨天の外は全體の深呼吸體操的簡單なる運動を  
なさしめて解散す。幼兒登園後此時庭園の清  
潔なるはなく、今迄多人數室内に居りたるもの

なれば、せめて暫時なりとも此清き空氣を呼吸  
せしめ、又部分及全體の運動を稍規律的になさ  
しむる要ありと思ひてなり。

謹  
賀  
新  
年

フ  
レ  
ー  
ベ  
ル  
會



# 遊戯と體操

|| リー氏に據る ||

紹 介 子

遊戯は教へられる必要がある。遊戯は教授を要求して後に、始めて成長の原理の一部分たり得るのである。子供といふものは、その本能的の性向の一結果として、その種族の傳習の上に成人せしめらるゝものである。而して教授は、假令それが遊戯本能によつて誘はれなかつた時に於てすらも行爲を有益に指圖し、従つて成長を決定するものである。子供は、自ら學びたいと望まないことを教へられて益を得る場合を屢々持つのである。

故に事實と傳習との教授に就て眞なることは、身心の訓練廣義に於ける訓化、教化に就ても眞である。

例へば私達は體操が遊戯でないのに筋肉を作る

ことを知つて居る。水夫や日雇人足は非常に骨の折れる仕事を日々繰返して居るにも拘らず、生理的に發達して居る。ピアノの音の具合を調べて居る場合には、その演奏者はそれが遊戯であること必要としない、而かも隣人にとつてはそれが喜びであるのである。

同じ事が熟練の多くの形式に就て眞であり得る力技的訓練は、それが單なる骨折仕事に過ぎない場合にも、要求した結果の幾部分かを産み出すものである。心意さへも、厭々ながら追求した研鑽によつて、發達せしめられ得るのである。

勞働——一つの仕事を擱へて、好き嫌ひなどを言はずに、しつかりと嚙り付いて居る——とは恐

らく、或る時期に於ける少年を最もよく成長せしめるものであらう。けれどもこれは遊戯意思を外部に放散せしむる所以ではない。

尤も遊戯に限らず、或る機關を働かしむるところのあらゆる活動の形式といふものは、その機關を發達せしめる。マッサージでさへも、筋肉を成長せしめるのである。

一般的に、すべて働かせらるゝものは成長する。然る時に教育的見地より、或る與へられたる活動に關しての重要な質問は、

如何なる力と機關とがそれをして働かしむるかといふことである。何故ならば、尠くも、それによつて齎らされた成長はその活動の進みよりも以上の進みを得ることは出来ないし、使はれなかつた機關は全然影響を受けることがないといふことが明かであるからである。マッサージや體操は、筋肉を發達させるけれども、心に達することは出来ない。——尠くも、遊戯が同じ筋肉を用ゐて、心に

達するやうな調子で、心に達することは出来ない。又マッサージや體操は、心と筋肉との間に、同じ關係を樹立することは出来ない。體操家の腕は解剖學的方面から言へば善い腕である、けれどもそれは拳闘家の腕ではない、大工の腕でも、ヴィオリニストの腕でもない。それは大きな筋肉を持つて居る、けれどもそれは、それを産出した演習に於て以外は、頭腦の訓練せられたる召使ではない。

人が體操家である以上、體操は人にとつて一つの教育である——而して人間には、正當の時期に於て振起せらるゝ價值のある猿猴的要素といふやうなものがある。獨逸に於ては、フアーザー、ジャーンは愛國心を體操の次位に置いて居る。

私達は手や足の運動を見ることは出来る、けれども、この手や足の運動を産み出すところの内部の動機を見ることは出来ない。けれどもこれに就て、尠くとも、私達は斯ういふことを確めることは出来る、即ちその活動が實際に於ては何うあ

らうとも——その深さ若しくは浅さが何うあらうとも、結果はその活動そのものよりも深く行つて居るなどといふことはあり得ないといふことである。表面の運動は表面の結果を産出するに止る。働かしめられない限り、何者といへども強められ太められることはない。

心の體操に就ても同様のことが眞である。若し心の體操が、單なる體操であるならば——深き興味に裏附けられて居ない智的運動の演習であるならば、その時は、よく行つて、斯る運動を繰返すべき力を獲得することが關の山である。私達は斯くして、完全な自働機械を拵へ上げることが出来るかも知れない。實業家が學校へ供給を望むやうな機械の一片が出来るかも知れない。マックス、オレルはフランスの學校の成績に就て、斯ういつて居る。「生徒は一生それを暗誦することが出来る位完全に彼等の課業を勉強する」と。學校出の機械に對する何んといふ婉曲な皮肉であらう。

表面の活動は表面の成長を産するに過ぎない、若し心を離れた筋肉、又は生々した興味と縁の無

い心的經過が教育の目的であるとしてもいふならば、斯る活動は正當な手段たり得るであらう、この考へを危険であると思ふ人々には、精神的及び身體的の體操が實に親しい友達でなければならぬ、精神的及び身體的の體操は善き教育である。身心を筋肉で包んで了ふといふ點——肉の外殼と破り難き習慣とを作つて、思想の進歩しない場合には、これを效果的に閉ぢ込めて置くといふ點に於て、精神的及び身體的の體操は教育そのものよりも優れて居ると言はれるかも知れない。

けれども教育を否定せず、益々これを進歩せしめて行かうとする人々には——魂を生きた牢屋の中に永久に閉ぢ込めて置かずに、自由に解放することを望む人々には、單なる表面の活動は大損失の如く思はるのである。筋肉的若しくは智力的の平易の發達は、是等の人々にとつては、目的ではなくて機會に過ぎないのである、より以上の或るものに達する道程としてののみ重要であるのである。筋肉は收縮的組織として價值があるのでなく、意志の運搬具として、價值があるのである。

筋肉と心とは、等しく魂の機關であつて、魂の命令の下に訓練せられ、魂の要求に従つて訓練せられ遂に魂の街路となるべきものである。

健康的の運動といふことは單なる筋肉の收縮を意味して居るのでないことは醫者の長く認めて來て居る事實である其處には目的がなければならぬ、興味があればならない、興奮がなければならぬ、最善の結果を産み出すためには、心身二つながら係らされてゐなければならぬ。

問題は實質のそれであつて、形式のそれではない。

教育的價値を十分に備へた體操以外に、純粹な無感激の體操が、子供を訓練する上に於て、全然無價値であるとは言はれない。是等は悪しき姿勢悪しき習慣、若しくは生理的の歪形を矯正する爲めに、屢々役立つのである。けれども是等は教育的效果といふよりは、寧ろ外科的、整形的效果を持つものであるから、治療法の方に分類せらるゝのが至當である。

人は否應なしに、常に變化して行く。人は、幼兒

時代に於ては、彼の遊戯を統一し、而して彼のその後の生活を支配する、偉大なる射出的本能の權化である。創造、扶養、狩獵、争闘、其他の本能が彼の生活を形造る。是等のもの、範圍外に於ては、彼を發見することは出来ない。深い意味に於ては、彼は是等の本能そのものである、是等は彼にとつては究極の事實である、是等は存在の世界にまでの彼の能動的投出である。是等は彼の依つて以て組織せられて居る究極の、不可換的の實質である、彼の身體は是等の本能の道具である、彼の意や情は、是等の本能のエマネーションである。人は、各々創造者であり、扶養者であり、科學者であり、争闘者であり、狩獵者であり、詩人であり、市民であるのである、彼は是等のすべてを兼ねて居る。然らざる場合に彼といふものは存在しない。子供の成長を妨げることが出来るかも知れない、けれども未來に發見せられるかも知れない如何なる巫術を以てしても、子供を書物に變へて了ふことは出来ない、機械に變へて了ふことは出来ない。

# 七不思議

み な と

七不思議は名所舊蹟の獨占か、妖怪變化の爲す業と定まつて居たのは昔の物語、此の科學が進歩したる今日には、何の不思議があるべきかと一笑に付せられる程、文明の空氣は彌蔓して居る時、かゝる問題を擔ぎ出すは物狂ひか、物數寄か、さても不思議なることではある。

不思議なる者が、不思議な事を、茲に描出するは、愈々以て正氣の汰沙でない。大方夢？併し諸君、夢にも正逆の二つあることを夢忘れ賜はず若し一つにても御心當りあらば御用心が肝要。

## 第一 新らしきもの當園には堅く

御斷り申候

例に依つて、刺を通して參觀を乞ふた。導かれて應接室に入る。園長？私を遇する至れり盡せりで

ある。部下の先生又一々來つての御挨拶は實に物體ない感がした。

愈々會集が始まるとの部下の御案内に急いで、遊戯室に行けば、幼兒は愛らしき笑みを湛えて、私を迎へた。園長は私を幼兒に紹介して「今日はお客様が皆さんの御行儀を見に入らした。さふの様に騒いではいけませんよ。お手を膝にのせて、ちやんとしておいでなさい。」私は身の縮まる程、情けなくなつた。

唱歌は朝の挨拶から始めて三つ計り、遊戯は「桃太郎」「かりくくわたれ」。「かちく山」。これで會集は了りましたとお話。何か貴園で、近頃お教へになつた唱歌か遊戯を見せて頂きたいとお願ひすると、園長は「人が新しいものを能く教へた

がりますが、私は好みません。矢張り古くからあるものは宜しいと思ひます。先づこれで此園の大半は窺ひ得た。

自由遊戯に移つた。砂場に杓子が五つ、かけ椀が三つ、早い者勝ち、奪ひ合ひが始まる。泣く、怒る、保母に見えて居るのか、恬として知らざるもの、如く、外には何にもこれと云ふ遊具もなく保母が二人彼方で互に笑ひ興じて語る、話題はそも何？ 一人の老いたる保母はお室に入つて、椅子に凭れて、二三の子が其側に遊ぶ。先生の目は幼児の上には注いで居ない。園長先生、頻りに私を應接室に導かうとする。私は特に之れを辭し一時間余、現状維持で室に入る。一の組の積木は唯幼児の爲す儘、別に導くのもなければ、出来上つたものを見て、奨勵するのでもなし。二の組では、繋ぎ方、これは又先生一人で立ち廻り、痒い所に手が届き過ぎる活動振り？ 幼児は舟か電車に乗せられて夢我夢中に一つ物が仕上がる。

先づ此の位にして、後は園長の御高見を承らんと應接室に入れば、茶菓既に予を待つこと久しいふ有様。感謝の意を表して、座に着く。そこへ幼児の母親が来て園長と語る。可なり富豪の家の主婦らしい。下へも置かぬ應對振り、其手腕は確に保育の實際より以上であつた。

客辭してから、園長と私と二人。種々と過去の歴史から變遷を承る。園風より保母間の交際、執務の狀況を推測して、不文律を成文にして見ると次の様である。

一 當園は創立以來の因襲に據り、世と推移せざるを以て特長とす。

(註) 進歩的になさんには、頭腦を惱まし、時間を費し、面倒限りなし、古きに習ふときは身を安逸に置き、極樂に居るの感あり。

二 幼児の取扱ひ、紛雜に陥らんとする時は、何時にても唱歌を以て防ぐべし。

(註) 朝、會集するときにも、保育室にある時

も、其出入も、歸宅せしるにも、唱歌を以て充たしむる時は、實に易々樂々なり、決して分量を云爲し、聲帯の顧慮は無益とす。

三手技は可成準備の取らざるものを選ぶべし。且手技を課する場合は、幼兒の力を用ふる時は、事面倒にして、紛雜し易し、須く其大部分は準備し置き、幼兒の爲すべき部分を、少くするを肝要とす。

(註)準備多ければ、吾等の歸宅も早く、雜談に時を移すも、思ひの儘なるべく、幼兒の力を多く用ゐざれば、氣苦勞もなく、室内保育の時間も少なく。後は自由に遊ばしむるを得。

四談話は同じ材料を繰返すも可なり、材料なき時は自由に遊ばしむべし。

(註)材料の選擇は面倒故に、お伽噺の書物其儘の順にて、二三冊用意しあれば、之れを使ふべし。

自然界の話等は六ヶ敷故以ての外なりと心得べし。

五職員は毎朝一人づゝ早出をなし、其他は時間に間に合ふを度とす。

(註)時に出揃はざれば、始業時を延ばすもよし。室内の整頓、幼兒の監督等は特に申渡されたる時(來客の時)の外爲さるること。

六幼兒歸宅後は保母室にて時々茶話會を開く。

(註)茶菓は順番により擔當すべし。談話は世間話しを第一とし、裝飾品、衣類、等に重きを置き、決して保育談の如き堅苦敷話題は避くるを要す。

七新任者に對しては古參の者より園の習慣を教へ、變りたる意見等あれば、遠慮なく破壊すべし。

(註)特に新しきことをなさんとし、幼兒を思ふこと深きは、吾等の敵と知るべし。宜しく、額に角して、攻め立つることを忘るべからず。

八來觀者及父兄は、極て町重に取扱ふべし。

九研究等の會は本園の方針に悖り、本園の主義を没却するものなるが故に、決して出席するを許さず。

此の九ヶ條の不文律、一々以て意外ならざるはなし。感極まつて、挨拶の辭も出ず、そこゝに園を出て始めて我れに歸つた。

# 一月

記 者

○四方拜 我國三大節の一。元旦の拂曉 天皇神嘉殿に臨御して、伊勢兩宮、天神地祇、神武天皇御陵、明治天皇御陵、武藏氷川神社、賀茂兩社、男山八幡宮及び熱田、鹿島、香取の三社を拜して太平を祈りたまふ。當日午前四時神嘉殿神樂舎に簀薦を敷き、四尺の屏風を立て、御座を設け、燈臺二基を供ふ。五時出御、御拜訖つて、賢所を拜し、入御したまふ。

○元旦 高臺に登つて初日の出を拜すれば諸事吉なりといふ。又恵方詣りと稱して、其年の歳徳神に詣で、福を授からうとするものもある。

○初夢 寶貨を載せた船を繪に描き、枕の下に敷いてよき夢を結ぶ。寶船の繪の傍に書いてある、「なかきよの とおのねふりの みなめさめ なみのりふねの おとのよきかな」といふ歌は上から讀んでも下から讀んでも同じである。守貞漫稿

に「此歌全浙兵制の附録日本風土記に見えて琴譜也と云」と書いてある。七福神と猿を描いた寶船もあるといふ、善い夢を見損つたら猿にその夢を食べて貰はうといふのである、用意周到なわけである。

○消防出初め 水柱の偉觀。梯子のぼりの離れ業。「め組の喧嘩」の世界に住む兄哥達の氣ほひの木遣節。板のやうに剛ッぱしい半纏。新しい手拭の鉢巻。鳶口の光り。

○陸軍初め 八日觀兵式舉行、

○七草粥 七日の朝、七草とて芹、なづな、ごぎやう、はこべ、ほとけのざ、すいな、すいしろを雜せた粥を祝ふ、しかしこの七種の草を集めるのは面倒なので大抵は小松菜とはこべとなづなの三草粥位にして丁ふ。この風俗は支那から來てゐる。即ち支那では七日七種の若菜を羹に調じて食すれ



ば萬病を除き、災厄を救ふと傳へて居るのである、我國でもこれに倣つて今擧げた七草を選んで、古くは正月子の日に羹に調じて食し、後世は正月七日に七種の菜粥に調するの風を爲したのである。

○藪入 十六日、俗に地獄の釜の蓋もあく日、小僧さんは半年振りて阿母さんの許へ歸る。小僧さんの頭の中は阿母さんと妹と天ぶらとお壽司と活動寫真とで一ぱいになつて居る。各所の閻魔堂はなはだ賑ふ。

○寒二十一日間 白衣を着た若い威勢のいゝのが産土神うぶつちがみに詣で、水垢離みづかひを取る、「六根清淨ろくこんじやうじやうッ」と掛聲はえらい、しかしガタ／＼もので齒の根が合はさらない。腰の鈴！

寒詣り走るかん／＼千鳥かな

紅葉の句だつたか。氣の利いた句だがそれだけだ。

○餅 食べすぎたら敷の子を少し食べること。

○羽根羽子板 古はこぎのこ、こぎ板と云ふ。世

諺問答曰略云初秋蜻蛉出て蚊を食ふ、こぎのこ形

蜻蛉に似て蚊を恐れしむの遊也、然らば昔は初秋等に弄あそ之歟。今は早春の弄物となる。唯女子を専とす。(守貞漫稿)

○萬歳烏帽子 直衣、大黒頭巾などの扮装にて鼓を打ち歩く。正月に限りたる一種の門附である。

○花 寒梅、早梅、迎年菊むかひねんきく、沈丁花しんぢやうか、福壽草。

○食品 雁、鴨、鮎、鮭、鱈、鯛、ひらめ、沙魚、芝蝦、伊勢蝦、牡蠣、蜆、獨活、葱、大根、菜、蜜柑、ころ柿、其他いろ／＼

○紙鳶

切つてやる心となれやいかのぼり 曉 臺

風をあげてゐる、よく高くあがつて居る、糸を持つて居る人も空に引上げさうに風糸の張りは強い、風に靈があつて、空に高く上りたがつて居るのを、人間が妨げて居るといふやうな感じがするえ、可哀想だ、糸を切つて、思ふ存分飛ばせてやれ、

○歌留多 エネルギー浪費の遊び！ □□會の選

手などといふ歌留多<sup>カクシメニア</sup>狂に碌な人間はない、甚麽に屁理窟をこねる人があらうとも歌留多は絶対に練習すべきものではない、歌留多によつて訓練されなければならぬやうな遅鈍なる頭腦は憐むべきである。但し血眼になつて他人の札を引奪らうとしないかぎり、於て歌留多遊びも新春のいゝおなぐさみである。

○双六 双六は古語にスグロクといふ、角なる采の六方に一より六までの數目を記したものの二個を一本の筒に入れ、盤上に振り出し、その數の多少に隨ひ、碁子を進めて勝負を決する遊戯である。後世采を以てする遊戯はみなこのスグロクより變じ來つたものであるらしい、この遊戯はもと印度より起り、支那を歴て我國に傳つたものである。このスグロクは今では行はれない。「玉藻前旭袂」といふ淨瑠璃に、桂姫と初花姫といふ二人の姫が互ひに命を庇ひ合つて、果てしがつかないので、双六で勝負を争はせ、負けた方の首を取るといふ

齣がある。あはれに美しい物語である。本當の双六遊びは徳川時代の始には漸く廢れて、新に佛法双六、官位双六などといふ簡易な遊戯に變形せられた、これは名は双六とはいふが、古法とは大いに趣を異にして居るものである。一枚の大紙に天臺の名目、官位の階級などを記したもので、全く婦幼に佛法の名稱、有識の次第を心得しめんために作られたものである。これが後世の繪双六の起原である。而してこの双六には始め采を用ゐず、六本の算木、又は六角に削つた細長い木に、佛法双六の法は南・無・分・身・諸・佛と記し、官位の方は詐・品・位・階・等・級の六字を記したのを用ゐた。これは古法の采は當時に至り博徒の手にするものとなつたので忌み嫌つたからでもあらう、扱てこの佛法双六から一變して淨土双六が出來、これから一般に繪双六となり、道中双六、出世双六も出來て、また采を用ゐるやうになつたのである。

○初天神 二十五日、東京では龜戸の天満宮が賑

ふ。

○うそかへ 筑前の太宰府天満宮にて正月七日の夜に行ふ祭事。當夜參詣の人々は木の枝其の他のもので作つた鶯の鳥を袖のなかに匿してゐて、行き遇ふ人々と互ひにこれを交換する。その鶯は神社から出すもので、その中に黄金製の一個あると云ひ、これを得るものが最上の吉であると言はれて居る。東京でも龜戸の天満宮が太宰府に倣つて安政三年から鶯替を始めた。但し龜戸は正月二十四及二十五の兩日、晝中にこれを行ふのが例である。その頃谷文晁、太田蜀山、龜田鵬齊等が相伴つて初天神詣を爲し、鶯鳥を得ようとして天満宮に請求したが既に賣り盡した後だったので、文晁は矢立から筆を取り出して鶯鳥の形を描いた。蜀山は「この神のまことの道のあらはれて、うそは賣切申候」と口ずさんだといふ。神社では文晁の繪と蜀山の狂歌とを上梓して、鶯鳥の賣り切れた時には、これを出すことにして居るさうである

往昔はなほ太宰府に於ける如く、人々が鶯を交換したのであるが、其間に摸掬が紛れ込んで、交換の間に人の財物を抜き掠めることが多くなつたので、遂に相互に交換することを禁ずるに至つた。この頃は祠前に鶯を賣る店が出て居る。鶯は柳の木で作り、尾と嘴とは赤く塗り、背部は緑で金箔が附けてある。

原始藝術のなつかしきがある。大小數種あつて大は十五六錢、小は一錢位。縁起を印刷した紙に包んである。參詣人は之を購つて、鶯取換所と貼札のしてある社務所に行き、その購つた鶯を出して、社務所から出すものと取換へるのである。鶯替は開運の効があるといふので、又鶯替といふことが珍らしいので、當日は參詣者が雲のやうに集る。「うそ」とは本來「嘯く」の義であるけれども、この神事では、虚言の義に解し、從來の凶事がうそになつて、吉事と取換へられるといふ意味にして、これを行つて居る。

## ○勅題の唱歌

滋賀縣彦根幼稚園保母中澤登免氏は勅題によりて唱歌を作り、曲譜を附して、同園の幼兒に唱はせて居られます。本年も御題「遠山雪」を主題として左の歌詞と曲譜とを創作せられたさうで同氏から通信がありました。

尙同園にては、忠君愛國の至情を幼兒の心に芽ぐませる目的で、勅題を主題として、簡単な細工物等をも工夫するさうです。都雅な意匠の施された「遠山雪」の細工物をも同氏より送り越されたのでありますが、製版時日に餘裕が無かつた爲めに、本誌上に掲載することの出来なかつたのを遺憾に思ひます。兎に角取り容れられ得べきすべてを取り容れるといふ點から見ても、勅題を保育の材料に應用するといふことは有益にして且つ興味の多いことであると思ひます。(記者)

### 勅題 遠山雪

天地のかすみてふかき遠山の

みゆきはいまや幾代重ぬる

♯<sup>4</sup>/<sub>4</sub> 遠山雪

1 5	1 2 3	5 5 5	3 5 6 5	3 3 2 2	5—
—————					
ア	メ	ツ	チ	ノ	カ
ミ	ヨ	シ	タ	ク	ニ
カ	サ	ミ	タ	フ	ー
カ	キ	ト	ー	ヤ	イ
5	6	5	1	2	3
2	3	2	1	6	5
—————					
1	2	2	3	1	—
—————					
ニ	ホ	キ	ハ	ノ	ー
ヤ	イ	ヤ	イ	ク	ヨ
カ	カ	サ	マ	ー	ル

## ○私立玉成保母養成所

### 生徒募集

私立玉成保母養成所(所長アラベラアルキン女史)にては四月新學年よりの生徒を募集中にて入學志望者は至急東京市麴町區上二番町三十六番地アラベラアルキン宛照合せらるべしとなり。因に同養成所入學者資格は高等女學校卒業者又は尋常小學校の準教員の資格あるものにして、修業年限は一ヶ年間(授業は午後二時より同五時まで)卒業者は東京府より無試験檢定にて保母の免狀を下附せらるゝ由なり。

# 色彩の心理 (一)

文學士 菅 原 教 造

## 一 色彩の印象

吾々の個人の精神活動から云ふと、色彩の經驗と云ふものは、大凡そ之を三つに分けて見る事が出来る。第一は「色彩の印象」、第二は「色彩の整理」、第三は「色彩の表出」と云ふ事である。

第一の色彩の印象と云ふのは、色彩の刺戟を取り容れる方面の働きを含むもので、之に(一)瞬間的印象と、(二)継続的印象との別を立てる事が出来る。(一)瞬間的印象と云ふのは、(甲)知覺(直觀)と(乙)感情との融合した状態であるが、今記述の手續上此の二つを別々に説いて見る。

(甲)色彩の知覺と云ふのは、色彩の刺戟の明鏡止水的の取り容れ方で、有りのまゝの色の姿をそっくり受取る態度を云ふのである。即ちエーテルの振動と云ふ物理的の刺戟があり、此の刺戟を受取るべき眼と云ふ末梢器官があり、此の刺戟が眼に働いて之を大脳皮質の視覺中樞に傳へて、茲に始めて形と色の知覺と云ふものが成立する。若し纏まつた形即ち種々の色の複合した姿を更に分解して其個々の色丈、例へば赤丈を取り容れたとすれば、そこで色彩の感覺と云ふ極めて單元的な生理心理的作用を起して来る。

(乙)色彩の感情と云ふのは、色彩の刺戟の雲煙渺茫乃至怒濤洶濤的の取り容れ方で、色の姿に味を付けて受取る態度を云ふのである。一體吾々の意識には、其時々緩急があり高低があり調子があり、決して寂然不動の面影のみを示して居ない。即ち氣分とか情調とか情趣とか情熱とか——總稱して感情と云ふもので味をつけてそれらの刺戟を取り容れ

る、色の感じ方でも、雲煙渺茫的に氣分の調子が緩く幽かに匂ふ事もあり、怒濤洶濤的に激越的の強い共鳴が意識を搔き亂す事もある。そしてかう云ふ時に最も強く働くのは其人々に特有な内臓の器官で、倒へば消化・呼吸・循環・分泌等其他の働、即ち生活感覺又は有機感覺と云ふものが、此の氣分や情緒と云ふものゝ大切な土臺に成つて居る。

瞬間的印象は斯の如く知覺と感情、もつと分解的に云へば感覺と感情との融合した渾一的の體驗であるが、若し刺戟を受け容れる時間をもつと續けば、此の印象はもつと複雑なものになる。即ち(一)繼續的印象になれば、知覺の外に之に再認や聯想や思想の働きが加はつて來る。そしてかう云ふものに更に氣分や情緒が加味して來て、茲にかなり複雑な色彩の印象を織り出して來る。

## 一一 色彩の整理

第二に色彩の整理と云ふのは、取り容れた色彩の印象を消化したり排泄したりする事である。明鏡止水的並びに雲煙渺茫的乃至怒濤洶濤的に受け取つた色彩の印象は、決して其時限りで消滅するものではない。一方では其人特有の醗酵素がむづくと之に働いて、即ち自分の氣分や氣質の調子で之を消化して、此の印象を自己流に醸造する。又一方では絶えず或る破壊や構成の働きの影響に働いて、一旦受け容れた印象の記憶心像の樹並みや枝振が淘汰され變形されて行く。化學作用に似たやうな此の氣分や氣質の醗酵も醸造も、器械作用に似たやうな此の記憶心像の構成も破壊も、つまりは其人並みに統一されて此の印象を作為し整理する。これ故永い間には此の働に對して知らず識らずの内に一つの纏つた個性的の型が出来上る。斯の如くにして其人特有の身構へ、即ち何時でも働けると云ふ個性的の出勤準備と云ふものが完成される。

### 三 色彩の表出

第三に色彩の表出と云ふのは、右に述べたやうに色彩の印象を個性的に作爲して出動準備が出来上つた後に、何かの機會に此の色彩感情と色彩心像とが、言語となり又は手の運動と成つて發表される事である。勿論此の作用は誰れも具はつて居るものでなく、天賦の傾向として特に詩人や畫家に限つて現はれて來る階級心理學上の問題である。先づ第一に此の表出の導火線となるものは感情である。所謂感興が湧けば、即ち創作的氣分が起れば、多くの詩人や畫家は一種の盲動的な興奮状態に入る。そして此の感情興奮はやがて彼等の豊富なる色彩心像を誘ひ出して、幻が湧くやうに彼等の眼の前に投げ出される。これと共に彼等の運動器官は動いて、若し繪の具が彼等の表出手段であれば繪畫や裝飾が成立するし、若し言語が彼等の表出手段であれば口又は筆で直觀的な色彩記載の文字が織り出される。

### 四 感覺としての色彩

以上色彩の印象と整理と表出とは、共に個性及び天賦の問題として心理學上の位置を占める。精しく云へば印象の仕方にも整理の方法にも表出の態度にも、それ／＼個人々々の感覺的・心像的・感情的乃至運動的素質が根本的に働いてゐる。それ故甲の人の色彩經驗は、決して其儘之を乙の人に強める事が出来ぬ。これは色彩に關して、美術や自然の鑑賞を論ずる場合にも、文學や繪畫の創作を論ずる場合にも、又色彩の教育を論ずる場合にも、深く注意しなければならない點である。

併し乍ら他の一方に於ては、多くの人に共通した色彩の經驗を廣く集め、之を一つの組織に取り纏めると云ふ事も決して不可能でない。殊に色彩經驗の知的方面、就中色彩感覺の現象に於ては、此の一般的記述が困難でない。

心理學書には軽く「意識要素としての色彩感覺」と言ひ流してあるけれども、併し此の取扱は決して一般に了解し易い性質のものではない。吾々の瞬間的の色彩の印象は、前にも述べたやうに知覺と感情との渾一的融合を示すものである。然るに、一方で此の融合體の現實性を大切に保持し乍ら、他方で知覺と感情とを分離して其知覺丈けを残し、更に此の知覺を分解して其成分又は要素としての個々の色彩例へば赤を取り出して來る——斯の如き厄介な手續を経て、初めて「意識要素としての色彩感覺」が成立する。吾々は此の分解と彼の現實性とを同時に合せ持つて、茲に初めて赤の感覺が出來上る。

斯う云ふ記述自身も既に抽象的で、決して一般に了解し易い性質のものではない。それ故に次に例を以て此の赤の感覺の成立を説いて見よう。

## 五 郊外の或る別荘の一室

吾々は今郊外の或る別荘の一つの部屋に入口に立つ。新しい疊の上に溢い座蒲團があり桐胴の大火鉢があり紫檀の机があり机の上には美しい卓上瓦期燈が置かれてある。天井には品の良い電燈が飾られ、長押には古びた石刷りの掛額があり、床の間には南畫の掛軸と大輪の赤い活け花が美事に飾られ、違棚には青い鉢植の花が咲いてゐる。

吾々は此の部屋の入口に立つたばかりで、かう云ふいろ／＼な道具の形や大きさや色彩や、其位置や距離や、其重さや固さや温度や手觸りなどを、直ちに知る事が出来る。茲に吾々に知覺がある。其外に吾々はかう云ふ諸道具に就て種々の事項を廣く或は深く思ひ浮べたり考へたりする事が出来る。茲に吾々の聯想があり再認があり思考がある。

同じやうに吾々は此の部屋の入口に立つたばかりで、此の部屋全體に瀰漫してゐる一種の氣分をしつとりと味ふ事が出来る。此の部屋の廣さ、明るさ、暗さ、温かさ、冷たさ。此の部屋に充ちた新しい疊の匂ひ、違棚の青い花の香、幽かに火



鉢に燻ずる香のかをり。全體としての此の部屋の色——例へば廻り縁のガラス戸の光を受けた早朝の冷たい青さ、南向きの障子に日を受けた時の暖かいオレンジ色、卓上瓦斯燈の鶯色の光に照らされた和らかい淋し味。及び部分として人を引付ける此の部屋の色——例へば鶯色の卓上瓦期燈の光が少し細く點ぜられた時、違ひ棚に置かれた鉢植の青い花が、靜かに遠い憧憬れを誘ふやうに吾々の心の奥に潜んで居る魂を引出すばかりに見える事や、又例へば南向の障子が一ぱいに日の光を浴びた時、床の間にいけた大きい赤い花が、燃え上るばかりに強く輝いて、吾々の眼や血や心をいら立たせるやうに見える事や。——茲に吾々の氣分があり感情の共鳴がある。

## 六 學僕——眼隠し——自動車——別莊——逆立——隣室の瞥見

今、活動寫眞のやうな場面が開展する。山の手の或る淋しい町に一人の學者が住んでゐる。此の先生に學僕として仕へる爲めに、田舎から出て来たばかりの素朴な一人の青年がある。彼は先生の命を奉じて、黒い布で眼を覆ひ綿で耳穴を塞ぎ、自動車で此の山の手の學者の家から運び出される。

自動車は間もなく前節に途した郊外の別莊の前に止まり、やがて學僕は「其部屋」の隣室まで運び込まれる。此の隣室の壁の下方に小さい穴が穿けられ、そこから「其部屋」が覗き見られるやうにしてある。眼かくしをされた儘の學僕は、先生の命に由て、腹の方を壁に向けて逆立をして、眼の位置を其壁に穿けた穴に當てる。先生は「用意！」と呼んで學僕の眼隠しを除く、學僕は此の隣間に「其部屋」を凝視する。忽ち先生は再び學僕に眼隠しを施す。

先生は直ぐ學僕を机に凭らせ、眼隠しを除つて、今視たばかりの彼の經驗を記載せしめる。「其部屋」は瞬間的にしかも逆倒して彼の網膜に印象された。何等の豫期なしに突然に逆倒して現はれた「其室内」の光景を瞬間的に視るやうに餘儀なくさせられた彼には、再認も聯想も思考も起る暇がないのみならず、知覺すらも殆ど完全に成立しない。彼は個々の道

具に就ても、それが座蒲團で、それが火鉢で、それが机であるかと知るだけの餘裕を有たなかつた。電燈も掛額も掛軸も其相互の距離も位置も上下も左右も、彼の頭に整理されて浮んで來ない。物體の名が浮ばないから、其固さも、重さも、溫度も、手觸りも考へられない。此の時彼の經驗の中心と成つて居るものは、床の間の活け花の焼き付くやうな赤い色であつた。

勿論花の形も判らない事もないけれども、色其者の印象と比べては非常に不完全であるから、之を度外視する事が出来る。又彼は此の花以外の色をも見たらうけれども、それは赤と比べると非常に刺戟が弱く、瞬間的の視視では印象が極めて不確實であるから、之も亦度外視する事が出来る。

故に此の學僕の經驗は大體に於て、赤と云ふ一ツ丈けの色の感覺と之に密着した感情との融合體であると云ふ事が出来るやう。此の融合體を赤い色の「感じ」と呼んで置く。そして此の融合體の内から其感情の方面丈けを分離して捨てたすれば其残つた部分は即ち「赤の色彩感覺」である。

## 七 色彩の分類と記述

扱て色彩感覺と云ふものゝ成立や位置が、右に述べたやうに生理心理學上から明らかにされるとすれば、従て此の現象を分類し記述して一つの組織に纏めると云ふ事も可能となる。これが即ち第一の生理心理學上の色彩記述である。

色彩は内的に見て右に述べたやうに吾々の意識界に於ける現象であると共に、之を外的に見ると人類が接觸する環境の上に及び人類其自身の上に現はれた象徴として、人類學的及文明史的の現象を形作つて居る。故に數萬年前の史前人類より史後の諸時代を通じて、現今の自然人及び文明人に至るまで、色彩は常に種々の原始的な科學や哲學や宗教に因つて原理を立てられ分類され記述された。これが第二の人類學及び文明史上の色彩記述である。此の方面の時代錯誤的の最も面

白い例としては、久保田米僊翁の「美感新論」中の色彩論を挙げなければならぬ。此の書は翁が明を失してから後、明治三十八年に出したもので、其色彩論は純然たる原始的東洋哲學流の思想から成つて居る。今其二頁及び三頁の記事を抜いて見やう――

『先づ天地開闢の時に天と云ひ地と云ふ形が現はれる。これは水・火・土の三原から成立つて居るのだが、やがて土より金・木を生じて五行となると、色彩と云ふものが――即ち天の色地の色と云ふものが出来る。故に美の根源は殆ど色彩が支配して居るので、更に其源は太陽である。我國では之を日の神と云ひ、印度では大日如來と云つて拜して居り、支那では日を以て天子に象どり、積極に之を尊重すべきものとして居る。』

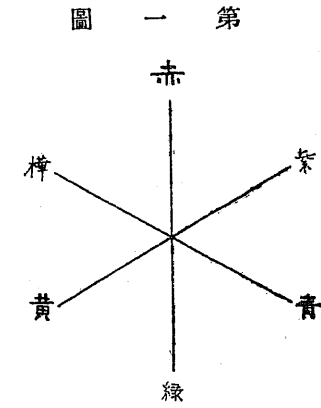
凡て燈火は皆悉く太陽を呼び來るものである。今燈火の色を見ると、上の方が赤・中央が黄・下の方が青に成つて居る。この三色は即ち太陽の色彩で、又一切萬物を支配する。この三色は光明であるから随つて溫熱を有つて居る。一切萬物は實にこの溫熱に因つて發育せられる。而してこの三色は更に他の二色(白黒)を生ずる。即ち黄と白とは共通の色であるから黄が變じて白となり、一方では又赤が強く成つて黒となる。其順序は赤即ち紅が強く成つて紫となり、紫が更に強く成つて黒になるのである。併し之は陽の黒である事を知らなければならぬ。陰の黒は之と異つて別の順序を取る。即ち青は之を薄くすると淺黄になるが、反對に強くすると紺になる。紺を更に重ねると黒になる。之が即ち陰の黒である。外に又赤からも白が出るし、淺黄からも白が出る。乃ち太陽の原色たる三色から二色を生み出して五色と成つた。此の五色の中にも陰陽があつて、假りに二つに分けて見ると白と黒とは陰に屬し青と赤とは陽に屬する。獨り黄は中央に位してどの色にも附いて行く。』

若し昔支那に五行説が発生して、併もそれがかなり強く日本人の思想に共鳴してゐなかつたなら、科學や哲學の開けた明治末の日本人は、決してかう云ふ議論を公けにしなかつたであらう。

次に色彩は繪の具又は染料としての其使用上の便宜の爲めに、技術家から種々に分類され記述される。これが第三の技

巧上の色彩記述で、洋畫又は日本畫殊に圖畫教育に關する著書などの色彩論中に種々な分類を試みられて居る。例へば色

を溫色と冷色とに分けたり、透明色と不透明色とに分類したり、或は繪具製造法上の及び繪の具の混色法上の原色たる赤・黄・青の三色を唯一の原色と見做し、第一圖に示すやうに、此の三原色の二つを混合して第一間色なる橙・綠・紫の三色を立て、此の六色の對立から、生理心理學上の基礎からでなければ説く事の出来ない餘色や色の對比の現象までをも付會して説明しようと試みたりする。



## 八 光感覺即ち白・鼠・黒の系統

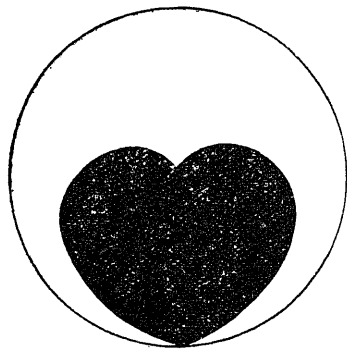
生理心理學上の色彩記述からすれば、色彩感覺は大體に於て二つの系統に分つ事が出来る。第一は光感覺即ち白・鼠・黒の所謂括淡なる色の系統である。第二は色彩感覺即ち赤・黄・綠・青・紫等の所謂炯爛なる色の系統である。

光感覺の系統は、白から追々に薄鼠色になり、其薄鼠色が段々に濃く成つて、最後に黒に至るまでの徑路の一組織を意味するもので、之を圖式で現はせば第二圖のやうに一直線を以て示す事が出来る。此の系統は言語を以て呼べば單に白・鼠・黒に過ぎないけれども、實際吾々が區別し得る光感覺の數は、六七百を數へる事が出来る。云は

第二圖



第三圖



れて居る。

標本としては獨逸のライプツヒ市のネンデル商會では、四十五枚の白・鼠・黒の連續的系統の紙を用意して居る。併し最も簡便に此の光感覺の一系列の變化を出すには第三圖に示すやうに、白の圓版に心臟形の黒の紙を當てたるものを廻轉するのである。

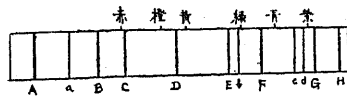
## 九 色彩感覺系統の第一方面——色調

色彩感覺の系統は光感覺の組織に比べると非常に複雑であるから。通例三方面に分けて記述される、(一)色調、(二)飽和、(三)明度これである。

色調は本來は色の調子と云ふ事で、此の言語の起りは音の方から來たものである。例へばピアノでド・レ・ミ・ファ・ソ・ラ・シと音の調子(音の高さ)が變つて行くやうに、色も赤・樺・黄・綠と其性質が變つて行く事を意味するものである。色の調子は又色の性質(約して色質)とも云はれる。其變つて行く順序は分光色で示す事が出来る。三稜鏡又は屈折格子を用ゐて暗室に細く導いた太陽の光線を分折すれば、色調の變化ある美しい色の帯が出来る。勿論色調の数は非常に多いが、之を表はす言語は極めて少數であるから、此の分光色の發見者たるニュートンは取り敢へず七つ丈の言語を選んだ。此の連續的色調の一部一部に名を付けて見た。即ち赤・橙・黄・綠・青・藍・紫の七つである。此の命名以來、太陽の光線は七色から成ると云ふやうな説が行はれるやうに成つたが、これは正しくない。ニュートンの命名したのは、此の分光色の色調の数は七つ丈であると云つたのではなく、たゞ七つの最も普通に行はれてゐる言語で、其連續的色調中の主なものを代表させたに過ぎない。そんなら吾々の區別し得る色調の数はどの位あるかと云ふと、此の七つの約二十倍たる百五十種位に達すると云はれてゐる。

第四圖は曲折格子の分光色の圖で、A B C D等は分光色中の黒線(フラウンホーフェル氏線)を示す。刺戟としてはA BよりE Gの方に移るに従つて、エーテル波の波長が小に成つて來るので、之に伴つて感覺としては色調が赤・橙・黄より緑・青・紫の方に進んで行く。波長の幾何の所が如何なる色調の名に應ずるかと云ふ事は、學者に依つて決して一様でない。今ビルスビュリー氏の示す所に従へば次の通りである。

第四圖



赤	0.000661—0.000656	ミューメーター
橙	0.000611—0.000606	〃
黄	0.000582—0.000577	〃
緑	0.000519—0.000514	〃
青	0.000472—0.000467	〃
紫	0.000424—0.000419	〃

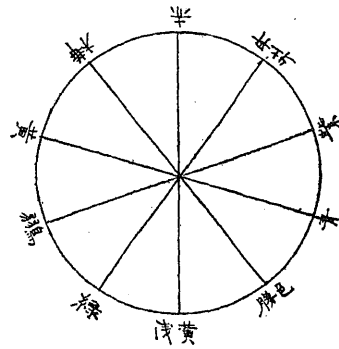
分光色中の右の色調の位置は第四圖に示した通りである。

然るに此の分光色は——たとゝ覗いて見る丈けならハンド・スペクトロスコープと云ふ便利な小さい分光器があるけれども——實驗室に入りでもしなければ、誰にでも直ぐ使用されると云ふ譯には行かぬ。それ故一般の色彩研究者は分立器の代りに色紙を貼つた圓版を代用して實驗をする。

實驗用の色紙には二種の別がある。第一種は普通の色紙のやうに繪の具を油で練つた印刷用インキで刷るものである。此の種の色紙で最も多く用ゐられて居るのは、米國マサチューセツツ州スプリングフィールド市のミルトン・ブラッドレー會社の色紙で、之は日本でもかなり廣く用ゐられてゐる。然るに此印刷用インキは油を混ぜる爲めに、刷り上つた色は一體に黒ずんで甚だ汚れない。殊に右の會社の色紙の赤は不愉快な暗赤色である。

第二種の色紙は右の缺點を除く爲めに、油を用ゐて印刷する代りに、薄い紙の表裏から染粉を固く打ち付けて、非常に

第五圖

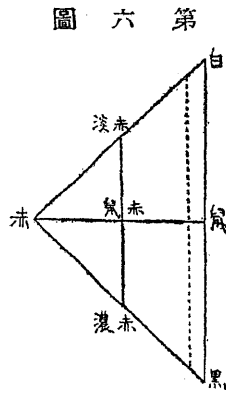


牙えた色を出して居る。獨逸のライプツィヒ市のローテ會社やツィンメルマン會社の色紙がこれである。今此の獨逸の色紙を揃へ、先づ赤から出立して似た色と漸次に並べて、樺(橙)——黄——鶯(黄緑)——綠——淺黄(黄緑)——勝色(綠青)——青——紫——牡丹色(赤紫)とする。然るに牡丹色は最初の赤に似て居るから、此の配列は自然と輪の形と成る。即ち色の調子の變化は赤に始つて赤に返り、此の關係を圖式に示すも第五圖のやうになる。故に之を色輪と稱する。

## 十 色彩感覺系統の第二方面——飽和

飽和は元來物理學上の言語で、例へば一定の水に溶解すべき砂糖なら砂糖の限度の分量を指すもので、その砂糖水が一旦其限度に達すれば即ち飽和して仕舞へば、これ以上の砂糖を入れても溶けずに沈澱する。このやうに、色の有する限度の純粹さやえ加減又は色の度を飽和と名ける。故に飽和色とは限度に純粹な色で、不飽和色とは不純な(淡い、濁つた又は濃い)色を指すのである。吾々の經驗し得る限りの最も飽和した色は太陽の分光色スペクトラムを最上とし、之に亞ぐものは上等の色硝子で作つた色の光線であり、更に之に次ぐものは獨逸製の色紙又は染め布等であらう。尤も飽和は殘像や對比を利用すれば更に其度を増す事が出来る事を知つて居なければならぬ。これは後に其部分で説く事にする。

飽和不飽和の系統を圖式にして示したものは第六圖で、之を飽和の三角形と稱する。此の圖に因つて飽和色が不飽和化する方向に三種の別がある事が示される。圖の右の底邊は光感覺即ち白・鼠・黒の系列を示すものである。左の角頂は赤で、茲にある赤は最も飽和した赤である。此の赤より白に至る上向斜線は、飽和した赤が白の方向に不飽和化する系列を示す



第三圖に示したやうに、白や鼠や黒の圓版の上に心臟形の赤の紙を貼りつけて廻轉するのである。

一言すれば第六圖の白・鼠・黒と云ふ軸を遠ければ遠かるほど赤は飽和して来て、之に近づけば近づくほど赤は不飽和と成つて来る。そして點線に達すれば飽和は全く消滅して、光感覺の白・鼠・黒と成つて仕舞ふ。此の點を赤の覺閾と稱する。覺閾とは感覺の閾と云ふ事で、たとひ刺戟があつても、其分量が一定度に達しなければ、吾々には感覺として現はれて來ない。閾とは此の一定度の刺戟の分量を指すのである。之を實驗するには白の圓版に赤の圓版の少量を加へて廻轉し、逐次に此の赤の分量を増して行くのである。此の爲めにはマルベ氏の圓版廻轉器を用ゐる。初め赤が少量である時には、廻轉の結果は依然として白で、赤の痕跡だも現はれない。追々に赤が増加して、其覺閾に達して初めて廻轉圓版に幽かなる淡赤の痕跡を認める事が出来る。此の覺閾は人に依つて差がある。覺閾の少ない人は、即ち少量の赤を混じても赤の痕跡を認め得る人は、赤の感覺の鋭敏な人であり、覺閾の多い人は此の反對である。

吾々が區別し得る總ての調子の色の飽和色・不飽和の数は三萬五千種に達すると云はれてゐる。

もので、碎いて云へば赤が追々に白つほく又は淡く成る徑路を示すものである。次に赤より鼠（但し赤と同じ明度の鼠）に至る水平線は、赤が己と同じ明度の鼠の方向に不飽和化する系列を示すもので、碎いて云へば赤が追々に鼠つほく又濁つて來る徑路を示すものである。最後に赤より黒に至る下向斜線は、赤が黒の方向に不飽和化する系列を示すもので、碎いて云へば赤が追々に黒つほく又は濃く成る徑路を示すものである。此の三種の不飽和化の徑路を實驗しやうとすれば、



# の 一 本 日 年 幼 本 日

□ 倉橋惣三先生監修

本誌は、三歳から拾歳までの子供の爲め美しい繪と、面白い噺とを、教育的に組み合せた他に比類なき繪雜誌です。殊に毎號教育的な手技附録を添へます。

本誌は 玩具とお噺しとの興味及び教育的價値を兼ねあげせたるもの、子供には何よりも喜ばれ、何よりもよき友達となる。

## 定 價

壹册拾二錢 □半年 郵税共七拾五錢  
 郵税壹 錢 □壹年 同壹圓四拾四錢

御大典記念畫報 婦人畫報  
 皇族畫報 少女畫報  
 日本幼年

## 發行所

東京橋鍛冶橋外  
 振替東京四九〇〇

東京社

大正六年初春

# お芽出とう

保育用品發賣元

フレール館

東京市麴町區三番町

電話番町貳九〇九  
振替東京壹九六四〇

明治三十四年一月廿八日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)

婦人と子ども

第十七卷第一號

大正六年一月二十八日納本済  
大正六年一月一日發行

印刷所

凸版印刷株式會社本所分工場